
保育施設における園庭改良の取り組みと課題

清水 一巳・新田 司

Efforts in Playground Improvements and Future Challenges in Early Childhood Education Facilities

Kazumi SHIMIZU / Tsukasa NITTA

キーワード：園庭改良、自然、生態系

本報告では、平成30年公表の「これからの幼稚園施設の在り方について」に基づき、幼稚園施設の環境整備の基本方針を取り上げ、特に園庭の整備に注目する。M保育園の園庭改良プロジェクトを対象に、年間の工程を記録し、物理的変化および保育者の認識変容を分析した。園庭改良の過程において、多様な園庭環境としての特徴のうち「①物の特性や可能性についての理解」、「②長期的な展開」、「③園庭を保育者や子どもが主体的に変えていける環境と認識している」をみてとることができた。園庭の土壌改良、ひまわりの栽培などを通して、子どもたちの参画と成長が確認できた。

1 はじめに

平成30年に公表された「これからの幼稚園施設の在り方について」(2018)において、施設整備の基本的考え方が示されている。そこでは「屋内外を合わせた環境を整えることが重要である」こと、「幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活を展開できる環境を確保する」、「地域ぐるみで幼児達の様々な体験を通した学びを支える場」を確保するという基本的考えが示されている。さらに、「1. 自然や人、ものとの触れ合いの中で遊びを通した柔軟な指導が展開できる環境の整備」、「2. 健康で安全に過ごせる豊かな施設環境の確保」、「3. 地域との連携や周辺環境との調和に配慮した施設の整備」という3つの基本方針が示されている。これらは、屋内外の環境に係るものであり、園庭の整備においても基本的な考えとなるものである。また、「豊かな環境づくり」、「連携・協働を促す環境づくり」、「施設の配慮」という3つの観点から施設整備の充実が求められている。

秋田氏ら(2017)は、園庭を整備する際の指針について、国内外の事例を取り上げ、海外では「各国において子どもの視点や自然環境を重んじる考え方等の共通点はあるものの、独自の理念に基づき指標が作成されていることが示された」として、「文化や価値観」を背景に指標が作成されていることを明らかにしている。そして、国内の園庭の状況について「砂場や固定遊具などほとんどの施設で有している環境がある一方で、生き物が生息する水場などのように一部の施設

に限られる環境もあることが示された。また、落ち葉や水たまりなどのように実践によって残せる環境についても課題が残されていることが明らかになった」と述べている。そのうえで、多様な園庭環境の整備のために、多様な園庭環境のある園の特徴として、「①物の特性や可能性についての理解がみられる、②園庭に対する取り組みが一時的なものではなく、長期的な展開を検討している、③園庭を保育者や子どもが主体的に変えていける環境と認識している、④情報といったソフト面での開示や交流を重視している」ことを明らかにしている。本報告では、この4つの視点を取り入れ、第一に、園庭の改良を実施した際の物理的変化の過程を整理し、第二に、園庭の変化の過程における、保育者の園庭改良に対する認識の変容について明らかにすることを目的とする。

2 研究の方法と概要

M保育園は、関東圏の都市部に位置する保育園の園庭改良プロジェクトの年間の工程を記録し、構想期から実行期、移行期の園庭の物理的変化を整理する。合わせて、保育者へのインタビュー調査から、各工程の物理的特徴と保育者の園庭に対する考え方、園庭改良の認識の関連について、分析をおこなう。インタビュー調査は、各工程の園庭の様子と子どもの遊びの様子をビデオ撮影したものを観ながら、回想的に実施した。

3 園庭改良の過程

(1) 園庭改良の始まり



図1-1 改良着手前の園庭と遊び



図1-2 改良着手前の土壌

園庭改良プログラムに着手する前は、園庭の中心は広く平らなスペースがとられ、3分の1のところ、プランターを使い3歳以上児（3分の2）、3歳未満児（3分の1）と区切られていた。どちらも平坦であり、子どもが穴を掘ったり、土をかき集めたりするのが難しい硬度が高い状態のものであった。

01理事長：（園庭の）土を業者に見てもらったら、この土には『何も生えない』と言われました。

先代が園庭を作るときに、このような土にしたそうです。これまで見ていても、雑草が生えたことがないんですよ。

02園長：（小学校の）校庭の土と同じということです。深さは30センチくらいを掘り起こして、

土を入れ替えます。

03園 長：まあ、でもね、これで環境が変わると、雑草が生えてですね、なんかまた面白いことが起きて、その虫追いかけてみたいなのが始まると思うんですよ。

(2) 園庭改良への子どもの参画



図2-1 土の入れ替え作業



図2-2 種まき（5オクラス）

5月中旬に園庭の土壌の入れ替えに着手し、15m×15m四方（深さ約30cm）の土を入れ替えた。土は、山間部の土壌を敷き詰めている。

（土の入れ替え作業時）

04調査者：大きな、ああいうショベルカーが入った時の子どもたちの様子っていかがですか。

05園 長：もう、（保育活動が）できませんよ、はい、できません。（トラックやショベルカーでの作業に夢中になって、他の活動ができない）2階からもよく見えるんですよ。

06理事長：あの、子どもたちが作業者の人に言ったみたいなんですけど。子どもが保育者に交渉して、（ショベルカーの）運転席に乗せてって言ってみたいなんですよ。そして、運転席の方に乗せてもらって。

（ひまわりの種まき）

07保育者A：これまでのプランターですとかあるいはこちらの畑で育てていたときと、何かこの広さがあるところで育てていくっていう。ひまわり自体は一緒に育てたりっていうのもあったので。でもこういうのができたっていう段階で子供たちにとってはもうこれからどんなことが始まるんだろうっていう。

ひまわりをいっぱいここに入れるんだよっていうのを言っただけでも……今度はここいっぱいになるイメージが。とにかくやっぱりもうね、ひまわりが咲いてないこの状態だけでももうわくわくが止まらないからはい。

08保育者B：逆にこう土が入って、このちょっと初めの頃はこのそうですね。柵があって子どもたち、そういうところでなんか戸惑いというか、なんかこう遊び方が、ちょっと難しそうだなあっていう感じは。

09保育者B：朝登園するときには、このちょっと自分でこうやって見て、なんだろうみたいな感じだったのかもしれないですね。

10保育者A：結構何もない状態でも柵があると何かちょっと朝からここを眺めていたり。そう



図2-3 芽吹き



図2-4 成長への関心

ですね、保護者の方々からしても何ができるんですかとか、あと近隣の方からもすごい言われて。実は、ここちょっと畑になって、夏にはひまわりが咲く予定なんですよなんて言ったら、それはすごいね楽しみって。

(3) 園庭改良の継続



図3-1 ひまわり畑



図3-2 ひまわり畑との出会い

11保育者A：やっぱカラカラになってるとすごい心配して、やっぱり自分がどんどん（のどが）カラカラだとすぐに水分欲しくなる。だからひまわりもやっぱり朝先生たちあげてくれてたけど、ちょっと上から見たら乾いてる。

12保育者A：熱中症脱水症状が起きちゃうよとかっていうことを言う子もいたり

13保育者B：ひまわりが咲いてからは他の学年も中に入れてもらったので、夏の暑い時期でしたけど、そう、ちょうど暑い時期なので、これぐらいの時は年中さんもそうですね。こう気分転換に外に行く口実ができたので、ちょうど良かったです。あの暑くて外遊びができないけど、ちょっとだけ、見てこようかと。

(ひまわり畑の遊び)

14保育者B：このぐらに入ったときに、ちょうどひまわりが。 まあ、そんなにすごい大きくはない。 かならず同じぐらいだったので、これは僕と同じぐらいとか。 うん、これはちっちゃいよとか咲いた時にも言っていて、ちょっとその大きさに関しての興



図3-3 ひまわり畑の散策



図3-4 ひまわりとの遊び

味があったりとか、テントウムシがいたりとか、他の虫も。

15保育者B：道がわかったみたいなのと、本気で迷っているのと。先生、出れないよって。もう道を1回通ってわかっている子がいても虫が嫌で。

16保育者B：1回全部とってしまって、今度はクローバーを今増えていると思うんですけど、その時に、えっと、園長とかが耕してたんですよね。自然の粘土が出て、塊が脇にあって、こうなんて使った粘土が混ざってたから、よけたんだよって。あの用務員さんに教えてくれて、子どもたちにこれ粘土なんだって言って教えてあげたら、売ってる粘土しか見たことないので。ボロボロにしたら柔らかい粘土みたいとか、そういう発見はあって。

あと砂場の砂と、土が違うじゃないですか。でも、普段、畑が多分周りにちょっとあったんですけど、それは掘らないでって言われちゃってるから。でも砂場と混ぜちゃうと難しいからねっていう話だけをしていて、畑のこの土を掘る経験もないから、喜んで穴ほこだけなんです。

17保育者A：ひまわりの種多分、何個か落ちちゃってたやつが新しく見え出し、はじめは端っこの辺りとか。子どもたちが最初に、「あれ夏終わってひまわり全部なくなったのに先生また目が出てきてるよって」言ってきて。



図3-5 園庭の畑

4 考 察

(1) 保育者の取り組みと変化

1) 園庭改良のはじまり

M保育園の園庭改良は、理事長と園長が抱く「自然体験」への思いから始まったものである。理事長が「この土には『何も生えない』と言われました」、「雑草が生えたことがないんですよ」と述べたように、園庭の土に対する認識や、園長の「これで環境が変わると、雑草が生えてくる

んです」という説明からは、これまでの保育園の園庭が「自然」と距離を置くように人為的に作られてきたことがうかがえる。ここには、雑草という生態系（生命）が生まれることへの強い関心が見られる。また、秋田氏ら（2023）が実施した調査でも、保育者の8割が「自分の生命と自然や自然界の中のつながりへの理解」を示しており、これは保育者の価値観の一つとして捉えることができる。

園庭改良作業では、まず、土の入れ替えをおこなっている。そこでの「トラック」や「ショベルカー」への子どもの興味関心に対して、保育者が運転席にのせてもらう交渉をおこなうことで、作業自体も子どもの体験活動として、保育に取り込まれている。

2) 園庭改良への子どもの参画

土の入れ替え作業においてトラックやショベルカーといった作業者が園庭に入ることにより、これまでの日常では見ることでしかなかった（図鑑などでしか見ることでしかなかった）乗り物を目の当たりにすることになる。これらの重機に触れる（乗る）体験を通して、子どもは「園庭を作り変える」という世界に出会うことになる。日常的な環境が大きく変わることを視覚的に知るだけでなく、重機に触れることでその大きさを実感していることになる。そのことが、「これからどんなことが始まるんだろう」というわくわく感の醸成にもつながっている。

この大きな作業で入れ替えられた土に、種をまき、水をやることでひまわりの芽がでるという「生成」の体験をすることになる。毎日の登園時、降園時に「なんだろう」と興味を向けることで、芽が出る、芽が成長するという生態系（生命）を実感することでもある。そして、（10保育者Aから）同じ体験が保育園の職員や近所の住民の中でもおきていたと推察することができる。

3) 園庭改良の継続

ひまわりの成長に伴って、子どもは、成長に必要なことが何かを考えるようになっていく。他の植物の栽培経験から水の大切さを知っており、同時に自分の身体（のどの渇き）と同化させて、ひまわりを見るようになってきている。

ひまわり畑の中に入ると、自分の身長とひまわりを比べたり、同じ高さのひまわりを探しに行ったりするなど身体全体でひまわりを感じている姿が見られた。そして、畑の中に入り込むと、「自分と同じ高さ」のひまわりに囲まれ、ひまわりの中を走り回り、ひまわりの中に溶け込む体験をすることになる（15保育者B）。

5 まとめと今後の課題

理事長と園長の「自然」に対する思いから始まった園庭改良にたいして、子どもと保育者は日常の生活空間の変化を「土の入れ替え作業」、「重機」に触れることで実感することになった。そして、園庭に広がる畑で、ひまわりの成長を実感し、これまでの植物の栽培知識を拡張する形で関わりをもつようになっていく。さらに、ひまわりの大きさを自分の身体と比較し、ひまわり畑の中に溶け込んでいく体験をしている。また、ひまわりの刈り取りをおこなった後も、自然と落ちた種が芽を出していることを見つけ、ひまわりの生態系としての自然を感じるようになった。この長期的な一連の変化が、理事長、園長の自然への思い（生態系への関心）であり、園庭改良という物理的な変化だけでなく、そこに、土や植物の変化が加わり、さらに子ども、保育者が関わることで自然の変化を感じる環境となっていると捉えることができる。このことから、M

保育園での園庭改良の過程において、多様な園庭環境としての特徴のうち「①物の特性や可能性についての理解」、「②長期的な展開」、「③園庭を保育者や子どもが主体的に変えていける環境と認識している」をみてとることができた。今後は、さらに「園庭の畑」の継続性と、その周辺（地域）との情報共有が課題として挙げられる。

参考文献

学校施設の在り方に関する調査研究協力者会議、「これからの幼稚園施設の在り方について」、2018.3、文部科学省

秋田氏ら、「園庭環境の調査検討―園庭研究の動向と園庭環境の多様性の検討―」、2018.3.29、東京大学大学院教育学研究科紀要、第57巻別冊

秋田氏ら、「園庭環境に関する研究の展望」、2018、東京大学大学院教育学研究科紀要、第58巻